

2. 事業の目的と概要	
<p>(1) 事業概要</p>	<p>本事業は、パキスタン・イスラム共和国ハイバル・パフトウンハー州ハリプール郡の公立小学校 2 校を拠点に、インクルーシブ教育 (Inclusive Education: IE) の理念と実践を導入することで、障がい児が適切な配慮を受けながら、非障がい児とともに学べる環境を整備することを目的とする。加えて、本事業で得られた成果を、現地当局が主体的に他校へ普及するための活動を実施する。なお、ここで言うインクルーシブ教育とは、「障がいの有無に関わらず、すべての子どもが、暮らしている地域でともに学ぶこと」を意味する。</p> <p>障がい児の教育機会を拡充するために、各拠点校及び各コミュニティに障がい児の教育支援を推進するための体制を確立する。拠点校ではインフラ整備及び教員の能力強化による障がい児の受け入れ体制を整備し、コミュニティでは不就学障がい児を特定し、行政サービスへつなぐための活動を行う。また、拠点校での活動が行政にも認知されるよう公立学校を管轄する教育局、及び障がい児教育を管轄する社会福祉局の各担当者を、これら支援体制を推進するためのメンバーとする。事業最終年には、本事業で得られた成果が他校へも普及されるよう、IE の導入と実践に必要なガイドラインなどのツール類を取り纏め、普及対象校として選出された他 2 校において関係当局と協働して IE を推進する。</p> <p>The project aims to increase the education opportunity of children with disabilities (CWDs) by introducing the concept and practice of inclusive education (IE) in Haripur District, Khyber Pakhtunkhwa Province, Islamic Republic of Pakistan. Through this IE approach, the project strives for the achievement that CWDs become able to study together with other children while considering of reasonable accommodation for CWDs. In addition, this project also aims to build the capacity for the national government to be able to promote IE approach by themselves. In order to expand the education opportunity of CWDs, AAR will establish the framework to promote the support of CWDs in the targeted two schools and the surrounding community. In the targeted schools, AAR will establish the system to accommodate CWDs in the school such as infrastructure improvement and capacity building of school teachers while identifying out-of-school CWDs in the targeted community. Also, to obtain acknowledgement from the national government, the project will involve the education department and the social welfare department in the process of promoting IE. In the final year of this project, the guideline detailing know-how for successful introduction and practice of IE, which was obtained from the 1<sup>st</sup> and 2<sup>nd</sup> year, will be prepared. This guideline will be utilized for IE implementation in another two 2 schools for further application of IE within the community in cooperation with the government.</p>
<p>(2) 事業の必要性 (背景)</p>	<p><b>(ア) パキスタンにおける障がい児教育の施策</b></p> <p>パキスタンの国家教育施策 (National Education Policy 2017-2025) では、全人口のうち、およそ 2.49% (約 500 万人) が障がい者で、そのう</p>

ち、就学年齢期（4歳～17歳）の障がい児は約140万人と推計<sup>1</sup>、これら障がい児のうち、特別支援学校などの教育機関に通学できている子どもたちは5%にとどまり、95%の子どもたちが教育を受けていないと報告している。こうした状況を受けて、同施策では、「障がい児の特殊教育とIE教育を通じた教育機会の拡充」を目標に、全ての教育機関でIE教育の理念を導入し、必要な設備や態勢を整備するための計画を定めている。

同国では、基礎教育に関する連邦政府の役割は、基本的な計画の立案や実施状況の確認等にとどまり、教育施策の主体は各州の教育局である。障がい児教育に関しては、パキスタン5州のうち、パンジャブ州とシンド州で上記教育施策に基づき、IEを推進するための担当部署を教育局内に設置するなど一定の取り組みを行っているが、連邦政府は、他州でも積極的にIEに取り組むことを推奨している。

### (イ) 事業地、事業内容の選定

本事業の対象州であるハイバル・パフトゥンハー（Khyber Pakhtunkhwa : KP）の教育統計<sup>2</sup>では、州の初等教育機関に就学している児童3,116,319人のうち、障がい児は24,208人（約0.77%）と報告されているが、これは、一般的に言われている総人口に占める障がい者の割合と比べると著しく低く、州当局が、障がい児の実態を正確に把握できていないことが推察される。またKP州では、2015年に策定した州教育計画で、障がい児が教育を受ける権利やインクルーシブ教育に言及しているものの、予算や必要な知識や経験を備えた人材の不足等から、障がい児教育の取り組みは特別支援学校を除くと非常に限定的であり、障がい児の就学環境の整備が著しく遅れている。

現在、KP州には、社会福祉局管轄の特別支援学校が39校設置されており、肢体障がいや視覚、聴覚、知的障がいを持つ2,549人の子どもたちが就学している。これらの学校では、中軽度の障がい児に対しては、教育局が管轄する一般公立学校への就学を勧めているが、多くの一般公立学校では、障がい児教育に必要な設備が整備されていないことや、専門知識をもつ教員がいないことを理由に、障がい児の入学が拒否されるケースが多い。一方で、当会が2019年1月にKP州ハリプール郡マッカン地区<sup>3</sup>（約1200世帯）で行ったインタビュー調査では、多くの障がい児の保護者が、自身の子どもに教育を受けさせたいと考えていた。同調査では、56人の就学年齢期の障がい児が特定され、そのうち29人が不就学であったが、うち18人の保護者は「子どもを学校に通わせたい」と回答。就学できていない理由として、「学校にバリアフリー環境が整っていない」（13人）、「学校が受け入れてくれない」（4人）などを挙げた。また、本事業で対象とする公立小学校2校に現在就学している障がい児は、トイレや階段の利用に不便を強いられるため、障がいのない児童とともに授業への参加ができないだけでなく、教職員や生徒の障がいに対する理解不足が原因で偏見や差別があることで教室では座席に座っているだけという状況にな

<sup>1</sup> 世界保健機構（WHO）の推定によると障がい者の全人口に対する比率は約15%である。一般にこの比率は発展途上国ではより高いと予測できるので、パキスタン当局の統計数値は正確な障がい者の数が統計に反映されていないと予測できる。

<sup>2</sup> Annual Statistical Report of Government Schools KP 2017 - 2018

<sup>3</sup> ハリプール郡マッカン地区は本事業対象地と地理的に近く、障がい児をめぐる環境は類似しているため、要因分析の参考情報として引用している。

	<p>っており、質の高い教育を受けているとは言えない。このように、障がい児が安心して通学し、個々の特性にあった教育を受けるためには、一般公立学校において、バリアフリー整備と併せて、教職員や生徒に対する障がい理解の促進や教職員の能力強化を行うことが必要である。</p> <p>他方、地域や家庭においても、課題がある。一般に当地では、障がい児を家の中に隠しておくケースが多く、その背景には、地域コミュニティにおいて、障がいに関する理解や、障がい児が教育を受ける権利や重要性についての認識が十分でないことが挙げられる。また、障がい児の保護者も、受給可能な政府の福祉サービスについての知識がなかったり、自身の子どもが教育を受けることを諦めるといったケースがある<sup>4</sup>。障がい児が、非障がい児とともに学び、社会参画していくためには、障がい児の保護者も含めて、地域全体で障がいに対する理解を促進し、障がい児を受け入れる素地を作ることが不可欠である。</p> <p>今後、一般公立学校とコミュニティが一体となり、障がい児の就学機会を拡充するためには、「インクルーシブ教育」の実践と普及を通じ、障がい児の学習環境の改善を図るとともに、他校に対してモデルケースとなり得るような、地域の資源と人材を活かした仕組みを導入することが必要である。そのため本事業では、対象地である KP 州ハリプール郡において、一般公立学校であり既に周辺学校の中心的役割を担う GPS No4 校、女子小学校の GGPS TIP、および両校の校区である周辺コミュニティを本事業の対象地とした（添付資料①「事業対象校選定概要—対象校 2 校の概要」参照）。また、将来、本事業での取り組みがモデルケースとなり、他校にも普及するよう、同 2 校の関係者だけでなく、教育局や社会福祉局も巻き込んだ事業を計画した。</p> <p>●「持続可能な開発目標(SDGs)」との関連性</p> <p>本事業における取り組みは、すべての人が質の高い教育を受けることができるようになることを目指す目標 4「すべての人に包括かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を促進する」に沿ったものである。具体的には、ターゲット 4.1 「2030 年までに、すべての子どもが男女の区別なく、適切かつ効果的な学習成果をもたらす、無償かつ公正で質の高い初等教育及び中等教育を修了できるようにする。」ターゲット 4.5「2030 年までに教育におけるジェンダー格差を無くし、障害者、先住民及び脆弱な立場にある子どもなど、脆弱層があらゆるレベルの教育や職業訓練に平等にアクセスできるようにする。」ターゲット 4. a「子ども、障害及びジェンダーに配慮した教育施設を構築・改良し、すべての人々に安全で非暴力的、包摂的、効果的な学習環境を提供できるようにする。」の達成に寄与するものである。</p> <p>●外務省の国別開発協力方針との関連性</p> <p>日本国外務省の対パキスタン国別開発協力方針（平成 30 年 2 月）において、重点分野として「(2) 人間の安全保障の確保と社会基盤の改善」が位置づけられており、教育については、あらゆる人々に教育の機会が提供されるよう、教育へのアクセス向上と、教育の質の改善を図ることを目標としている。本事業で、障がいの有無に関わらず全ての子どもたちが教育</p>
--	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

<sup>4</sup> マッカ地区で当会が行った調査で、医療や補助具の支給といった、障がい児の行政サービスへのアクセスについて尋ねたところ、障がい児 56 人中 52 人がサービスを受けるために必要な障がい者証明を取得しておらず、うち 46 人の保護者は、こうした制度があること自体を知らなかった。また、同調査で不就学だった児童 26 人のうち、3 人の保護者は聞き取りに対して、「自分の子どもが教育を受けられるとは思わない」と答えた。

	にアクセスできる環境づくりを目指すことで、本目標に寄与する。
(3) 上位目標	ハイバル・パフトウンハー州 (KP 州) ハリプール郡において、より多くの障がい児が個々の状況に合った教育を受けられるようになる。
(4) プロジェクト目標	<p>【3 年間】</p> <p>ハリプール郡中心部の 2 つの小学校 (男子小学校の GPS No4 校、及び女子小学校の GGPS TIP 校) を拠点に障がい児の教育支援活動を推進し、障がい児教育に係る環境<sup>5</sup>が整備される。</p> <p>【今期事業 : 1 年目】</p> <p>KP 州ハリプール郡中心部の 2 つの小学校 (男子小学校の GPS No4 校、及び女子小学校の GGPS TIP 校) において、比較的軽度の障がい児を受け入れることができる基礎的な教育環境、及び両校区に住む障がい児に対する就学支援体制が整備される。</p>
(5) 活動内容	<p>【3 年間の活動概要】</p> <p>本事業では、対象拠点 2 校 (男子小学校の GPS No4 校、及び女子小学校の GGPS TIP 校) において、インクルーシブ教育 (IE) 実施に必要な教育環境及び支援体制の整備・定着を通じ、対象校区内に住む障がい児が、個々の特性に合った教育を享受できるようになることを目指す。具体的には、障がい児の教育支援を推進する体制の整備、障がい児の特定・情報提供を通じた公的サービスへのアクセス向上、バリアフリー施設整備、学校関係者による障がい者の受入・対応能力向上、障がい児の教育を受ける権利に関する対象校区住民の意識向上等の成果達成に向けて活動する。これら活動の進捗や課題を共有するため行政関係者 (教育局、社会福祉局、保健局、州リハビリテーション評議会) と定期的に会合を開き、IE 推進に関わる関係者間の調整や連携を促し、支援を得る。また、現地関係者が他校で IE 導入の際に参照できるよう、活動内容や実施方法、関係者の役割等を文書化しツールとしてまとめる。</p> <p>3 年次活動においては、対象拠点 2 校における活動は継続しながら、加えて、新規 2 校に当該取り組みを導入し、対象拠点 2 校関係者の助力を得て、基礎的教育環境及び支援体制を整備する。また、本事業を通じて育成された対象拠点校関係者が、本事業の成果や学びを踏まえ、教員研修所あるいは大学の教員養成コースにおいて IE の理念についての講義を行う。</p> <p><b>活動 1. 障がい児の教育支援活動にかかる体制整備・活動実施【第 1-3 年次】</b></p> <p>(1-1) 対象拠点 2 校関係者、対象拠点 2 校区の地域住民、対象地域の障がい児の教育や福祉に業務上関わる行政関係者を対象に、事業概要説明会 (キックオフミーティング) を開催する。(第 1 年次)</p> <p>(1-2) IE 推進チーム、訪問相談チームを設立する。IE 推進チームは、対象拠点 2 校の学校長及び教員、保護者会長や会員、地域住民、教育局職員、教員研修所職員から構成される。訪問相談チームは対象校区の地域住</p>

<sup>5</sup> ここで意図する「環境」とは、障がい児が教育を受けるにあたり、教育施設 (ハード面)、教育内容 (ソフト面)、学校関係者の対応、家庭や地域社会の人々の考え方や対応等が阻害要因とならない環境、また障がい児の状況や学校関係者の対応能力を踏まえ、受け入れと適切な教育サービスを提供できる教育環境を指す。

	<p>民、レディヘルスワーカー<sup>6</sup>、対象地域の障がい者リーダー（障がい者の社会参加促進を目的とする JICA 案件<sup>7</sup>で能力強化されたリソースパーソン）から構成される。</p> <p>（1-3）IE 推進チーム及び訪問相談チームメンバーを対象に、活動に必要な能力強化のため、各種研修（添付資料②：主な研修概要（案））を実施する。第 1 年次はオリエンテーション研修（ハリプール郡において、4 チームに対し各 4 日間、障がい平等研修や IE、障がい者の補助などの研修項目を予定）、オリエンテーション研修参加者の中から選ばれた IE 推進チームを主対象とした複数日にわたる集中的な能力強化研修（4 泊 5 日、2 泊 3 日、計 2 回）、訪問相談チームを対象としたアウトリーチ研修（2 日間）、IE 推進チームと訪問相談チームそれぞれを対象としたリフレッシュ研修（各 1 日×4 回）を実施する。各研修では、事業の意義や重要性の理解促進を図るため、障がい当事者による講義も予定しており、重要な関係者である KP 州教育局関係者にもオブザーバーとしての参加を促す。IE 推進チームの能力強化研修はイスラマバードで行い、一回目の同研修に連邦政府の教育・福祉関係者を招き、IE 推進チームの設立式を行う。また、国内他州にあるインクルーシブ教育実施校を訪問し、教育施設や授業を視察、課題や対応等に係る意見交換を行い、KP 州ハリプールにて取り組むための具体的なイメージを得る。（第 1-3 年次）</p> <p>（1-4）上記の活動チームが受講した基礎研修と現地状況を踏まえ、活動計画や目的等を含む活動要綱を策定する。（第 1 年次）</p> <p>（1-5）上記活動チームが合同で定期会合を開催し、進捗状況報告や連携に関する相談、課題等の共有を行い、関係者への報告をまとめる。（第 1-3 年次）</p> <p>なお、上記活動に必要な PC やプロジェクターなどの資器材は、利用記録をつけるなどの管理方法を定めた上で、対象校の校長の責任の下で保管する。</p> <p><b>活動 2. 訪問相談チームによる障がい児家庭への個別訪問・情報提供・相談対応と個別情報の関係者との共有</b></p> <p>（2-1）訪問相談チームは、障がい児情報の取り扱いに関するルールや活動マニュアルを定め、訪問相談活動の際に使用するアセスメントシートを作成する。（第 1 年次）</p> <p>（2-2）訪問相談チームは、学校区内に住む障がい児家庭を戸別訪問し、保護者に対して障がい児の生活状況等を尋ね、収集した情報をアセスメントシートに記録すると共に、就学や、行政等が提供する福祉サービス内容や必要手続きに関する情報提供及び相談対応を行う。訪問相談活動を行う際には、周囲から一目で同チームだと判別がつくようにユニフォームを着用することとし、同ユニフォームを作成する。また、障がい当事者の視点</p>
--	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

<sup>6</sup> レディヘルスワーカーはコミュニティにおける基礎的な保健サービスの普及員。1994 年、家族計画とプライマリヘルスケアのための首相プログラムの一部として始まった。レディヘルスワーカーは、居住するコミュニティの保健施設に所属し、公的保健システムとコミュニティをつなぐ。人口約 1000 人を担当し、母子への予防接種推奨やプライマリヘルスケアサービス（健康促進、病気予防、治療やリハビリテーション、家族計画）を提供する。伝統的慣習や治安等により、女性や女児の外出が困難な地域では、レディヘルスワーカーの家庭訪問によるサービス提供が特に有効だと評価されている。

<sup>7</sup> 本事業地のハリプール郡にて、JICA は 2013 年～2015 年、KP 州社会福祉局を主なカウンターパートとして、障がい者の社会参加促進モデル策定の事業を実施した。また、隣接するアボッタバード郡において、JICA は 2008 年～2011 年、障がい者の社会参加促進事業を実施した。

を加えるため、訪問相談活動には、定期的に障がい当事者に戸別訪問アシスタントとして加わってもらう。(第 1-3 年次)

(2-3) 収集した情報の整理・分析を行い、関係者に共有する準備を行う。(第 1-3 年次)

(2-4) 訪問相談チームは、毎月 1 回以上、行政関係者（教育、福祉、保健）担当官や病院関係者等と会合を開き、障がい児に関する情報を共有の上、障がい児家庭が支援を求めた際に適切に対応するよう協力を求める。(第 1-3 年次)

### **活動 3. 基礎的なバリアフリー環境の整備**

(3-1) 対象拠点 2 校（GPS No. 4 及び GGPS TIP）における基礎的なバリアフリー施設整備について、学校関係者（教員、保護者会）や郡教育局、社会福祉局関係者へ説明の上、連邦政府が定める「アクセシビリティに関するデザインマニュアル&ガイドライン(2006)」の仕様に沿い実施する。学校施設のバリアフリー環境を整備することにより、アクセスさえ改善すれば一般学級で授業を受けられる、比較的軽度の障がいを有する児童が就学できるようになる。現時点では障がい児用トイレ、段差を解消するスロープ、校内の舗装路等整備、既存の教室の照明や黒板の変更、電気スイッチの位置変更、障がい児が使いやすいユニバーサルデザインの机やイスの調達・配備などを想定しており、IE 推進チームや現地関係者、当会専門家等で協議の上、最終決定する。(第 1 年次)

第 2 年次は、対象拠点 2 校において、多目的室の整備及び障がい児が使いやすいユニバーサルデザインの机やイスや備品の調達・配備を行う。多目的室は、障がいの程度や症状が要因で入学後ただちに一般学級で授業を受けることが難しい障がい児を対象に、将来の編入を見据えた準備教育を行う場とする。また、IE 推進チームや訪問相談チームの会議や作業を行う場所としても利用する。多目的室の仕様は、関係者と協議の上決定する。(第 2 年次)

(3-2) 上述 (3-1) の工事実施にあたり、IE 推進チームの担当者が工事業者の選定や入札・契約から工事中のモニタリング、完成後の維持管理に関わる。施設建設に関しては、バリアフリー工事経験を有する業者を選定するだけでなく、工事中の管理監督業務はバリアフリー工事に知見のある当会スタッフが立ち合い、質の確保を図る。当事業関係者は、バリアフリー工事の管理監督経験がないため、この過程は AAR スタッフによるサポートのもと、学校関係者（教員、保護者会）や教育局、社会福祉局担当者と共に行い、彼らのバリアフリー工事の管理監督に関する能力強化を兼ねて行う。(第 1-2 年次)

(3-3) 建設した施設の維持管理に係る研修を、IE 推進チームを中心とする関係者を対象に実施し、維持管理計画を作成する。(第 1-2 年次)

(3-4) 整備した設備の維持管理状況を定期的にモニタリングし、課題があれば関係者へ共有し対応する。(第 1-3 年次)

(3-5) (3-1) - (3-4) の活動をもとに、設備整備・維持管理に係るマニュアルを策定する。(第 2-3 年次)

### **活動 4. 障がい児を受入れるためのソフト面の環境整備**

(4-1) 対象校の全教員に対して、一般学級で障がい児を受け入れるために必要な知識や教授法に関し、2 泊 3 日の日程で研修を行う。研修は、郡

内にある特別支援学校の教員の協力を得て、当会専門家が行う。研修には、国内他州で使用されている IE 教材や過去の JICA 案件で活用された資料等既存のものを活用する。第 1 年次の事業期間中に、リフレッシュ研修を 3 回実施する。(第 1 年次)

(4-2) 在校生に対し、障がいに関する啓発授業を行う。また、車いすや歩行器、白杖などを障がい啓発に係る教材として活用、模擬体験を通し、児童が障がいについて適切な知識を持ち、障がい児が直面する困難に対し思いやりや協力の態度等を育むことが可能な環境を醸成する。また、日常的に使用するノートやかばん、弁当箱等に、障がいに関する標語やデザインをプリントし、全児童に配布する。(第 1-3 年次)

(4-3) 障がいの程度や症状が要因で、入学後ただちに一般学級で授業を受けることが難しい障がい児を多目的室で受け入れる。その受け入れのため、専門性を有する教員及び補助ボランティアを雇用する。雇用にあたり、教育局関係者等と事前に相談の上、募集・選定等必要な手続きを行う。(第 2 年次)

(4-4) (4-3) の教員や補助ボランティア及び希望する教員に対し、障がい児の個々のニーズに対応するため、より専門性の高い研修を実施し、彼らの能力を向上する。多目的室、一般教室で障がい児が適切な教育を受け入れられるよう、特別支援学校の教員や専門家の助言を得て授業を準備する。(第 2-3 年次)

(4-5) 願書受付時期(毎年 3~4 月と 9~10 月の二回)、IE 推進チームと訪問相談チームが協力して、障がい児家庭に就学を呼びかける。就学を後押しするため、ノートやかばんなど、必要な学習用具を配布する。この際、学校区内に居住し、既に特別支援学校に通っている児童についても、児童及び保護者が希望する場合は、同校と連携しながら、GPS No. 4 及び、GGPS TIP への編入の可能性を検討する。(第 1-3 年次)

(4-6) 就学した児童及び保護者に対して聞き取りを行い、教育環境改善に役立てる。(第 1-3 年次)

#### **活動 5. 啓発イベント開催**

(5-1) IE 推進チーム担当者が関係者と相談の上啓発活動計画を策定する。(第 1-3 年次)

(5-2) 対象拠点 2 校区住民を対象に啓発イベントを開催する。啓発イベントは、郡内の運動場やホールを貸し切って実施。学校に通う児童が参加するほか、保護者や住民を招待する。スポーツや文化活動(詩の朗読、スピーチ、演劇等)や、同国内で著名な障がい者を招待するなど、一般住民が関心を持ちながら、障がい児の教育を受ける権利やその重要性について理解を深められるよう工夫する。(第 1-3 年次)

(5-3) 上記(5-2)の啓発イベントにて、より多くの校区住民の参加を促進するため、啓発グッズや賞品を用意し事前に周知する。地元メディアへも働きかけ取組内容や障がい児教育の重要性が報じられるよう図る。(第 1-3 年次)

(5-4) 上記(5-2)の啓発イベントにて実施予定の障がい者の権利や教育の重要性に関する意識調査の準備・実施・集約を行う。(第 1-3 年次)

#### **活動 6. 障がい児教育支援活動の集約・関係者への共有**

(6-1) 活動 1-5 の取組みを郡教育局、社会保健局、保健局、州リハビリ

	<p>テーション評議会等 IE 推進上重要な行政関係者へ情報を共有する。具体的には、四半期に一度の頻度で郡行政官等関係者と、また半年に一度の頻度で KP 州行政官等関係者と定期会合を開催し、事業の進捗や成果を報告する。IE の重要性に関し理解促進を図り、当該プロジェクト実施に係る支援を得るのみならず、行政関係者間の調整・連携強化や IE 推進に向けた意見交換の場とする。(第 1-3 年次)</p> <p>(6-2) 上記活動 1~5 の経験をふまえ、活動内容や実施方法等を文書化し、障がい児教育支援の取組を導入する際、参照できるツールとしてまとめる。(第 2-3 年次)</p> <p><b>活動 7. 普及に向けた活動</b></p> <p>(7-1) 教員の研修を主管する KP 州の担当者をはじめとする教育局関係者、同州の大学関係者と調整の上、現役の教員や教職課程の学生を対象に、本事業を題材にした IE に関する講義を実施する。</p> <p>(7-2) 障がい児教育支援の取組に関する情報共有セミナーを開催し、ハリプール内の他校の学校関係者や KP 州行政関係者へ取組内容と結果を説明する。IE 実施に高い関心を有する 2 校を選定し、障がい児教育支援体制の整備を、行政関係者や対象拠点 2 校の関係者が中心となり支援する。</p> <p>(7-3) 新規対象 2 校区において、訪問相談チームが対象校区のコミュニティで障がい児世帯を対象に訪問相談活動を行う。</p> <p>(7-4) 新規対象 2 校における基礎的バリアフリー施設整備と維持管理研修を実施する。</p> <p>(7-5) 新規対象 2 校において、行政関係者や拠点 2 校関係者の協力を得て、教員・在校生を対象に研修や授業を実施する。</p> <p>(7-6) 新規対象 2 校関係者が中心となって、校区住民を対象に、障がい児の教育を受ける権利やその重要性について理解を深める啓発イベントを実施する。</p> <p>(7-7) 新規対象 2 校における取組状況に関し行政等関係者と共有する。</p> <p>直接裨益者：</p> <p>(1-2 年目) 計約 1,600 人 (詳細は以下の通り)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・対象拠点 2 校 (男子小学校の GPS No4 校、及び女子小学校の GGPS TIP 校)、同 2 校の学校区内に住む障がい児推定 100 人と家族 600 人、及び対象拠点 2 校の在學生と教員 916 人。</li> </ul> <p>(3 年目) 計約 3,200 人</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・対象拠点 2 校 (男子小学校の GPS No4 校、及び女子小学校の GGPS TIP 校)、同 2 校の学校区内に住む障がい児推定 100 人と家族 600 人、及び対象拠点 2 校の在學生と教員 916 人。</li> <li>・新規対象 2 校区内に住む障がい児推定約 100 人と家族 600 人、及び新規対象 2 校の在學生と教員約 900 人。</li> </ul> <p>間接裨益者：</p> <p>(1-2 年目) 計約 5,400 人</p> <p>対象拠点 2 校 (男子小学校の GPS No4 校、及び女子小学校の GGPS TIP 校) 児童の家族 5,400 人、地域住民、のべ 200 人。</p> <p>(3 年目) 計約 10,800 人</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・対象拠点 2 校 (男子小学校の GPS No4 校、及び女子小学校の GGPS TIP 校) 児童の家族 5,400 人、地域住民、のべ約 200 人。</li> </ul>
--	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

	・新規対象 2 校区の児童の家族約 5,400 人、地域住民約 100 人。
(6) 期待される成果と成果を測る指標	<p><b>成果 1. 対象拠点 2 校（男子小学校の GPS No4 校、及び女子小学校の GGPS TIP 校）において、障がい児の教育支援体制が整備され、活動が定着する。</b></p> <p><b>指標：</b></p> <p>1. 対象拠点 2 校において、IE 推進チーム、訪問相談チームが結成され、各活動が要綱で定めた活動割合で実施される（第 1-3 年次）</p> <p>2. IE 推進チーム・訪問相談チームの定期会合が、要綱で定められた活動割合で実施される（第 1-3 年次）</p> <p>3<sup>8</sup>. IE 推進チーム・訪問相談チームの各種知識調査結果が各研修前よりも平均 35%改善する。また、習熟度確認テストの正答率がメンバー全員 7 割以上となる。（第 1-3 年次）</p> <p><b>【確認方法】</b></p> <p>IE 推進チーム・訪問相談チームの会合議事録、チームメンバーリスト、活動要綱、活動記録、各研修前後のテスト結果、習熟度テスト結果</p> <p><b>成果 2. 訪問相談活動を通し、対象拠点 2 校区にて特定された障がい児家庭の教育や行政サービスへのアクセスが向上する。</b></p> <p><b>指標：</b></p> <p>1<sup>9</sup>. 対象拠点 2 校の学校区において、年間を通し 50 人以上の未・不就学障がい児が特定される。（第 1 年次）</p> <p>2. 訪問相談チームが、3 ヶ月に 1 回以上の頻度で各障がい児家庭を訪問、情報提供や障がい児の生活状況のアセスメントシートを更新する。（第 1-3 年次）</p> <p>3<sup>10</sup>. 特定された障がい児家庭のうち、2 割以上が行政サービスへ受給申請を</p>

<sup>8</sup> 2017 年に JICA は、日々現場レベルで障がい者と接している KP 州社会福祉局の職員 60 人を対象に、障がいに関する 3 日間の研修を行っている。その研修では、障がいに関する 16 項目の事柄（障害とは何か、障害をとらえる WHO モデルとは何か、CBID とは何か等）について、研修前後で参加者による理解度の自己アセスメント（「全く分からない」～「十分理解している」を 0～100%で数値化）を実施した。その結果、同研修では、約 35 ポイントの理解度の向上が見られた。本事業で同様に知識調査を行うにあたり、上記研修実績を踏まえ、目標値を 35%と設定した。加えて、当会が他地域にて過去に実施した研修の事後テストでは、テストの種類やグループにより正答率が 7 割～9 割であった。パキスタン当地において関係者はインクルーシブ教育になじみがないことから、理解したと判断する妥当な指標として 7 割以上と設定した。

<sup>9</sup> 世界保健機構は障がい者の人口に占める割合が約 15%と推計。対象拠点校の就学児童数に鑑み、学齢に達する前の児童数と学齢に達しても就学していない児童数が各校区約 50 人いると推定、設定した。

<sup>10</sup> パキスタンでは障がい者登録手続きに長期間を要する。社会福祉局に必要書類を提出後、医療機関で診断を受け、障がい者証明証が発行され、その後、次に国民 ID カード発行事務所（NADRA）への申請・承認を経て、州政府から障がい者 ID が発行される。障がい者証明証の発行まで 3-5 カ月、障がい者 ID 発行まで 1-3 か月かかるとされる（出典：ブリティッシュカウンシル報告書「Moving from the margins- Mainstreaming persons with disabilities in Pakistan」）。JICA が同州アボダバード郡で実施した「障害者社会参加促進プロジェクト」（2009-2011）では、情報提供を受けた人のうち障がい者証明書が発行されたのは 50%、障がい者 ID が発行されたのは 36%、補助具を取得したのは 23%だった。

（出典：JICA「障害者社会参加促進プロジェクト終了時評価報告書」）。障がい児の場合、障がい者証明書の取得は必要だが、18 歳未満のため障がい者 ID 発行手続きは行わない。当会現地スタッフの障がい児の申請に係る経験を踏まえると、障がい者証明書発行後、社会福祉局やベイトウルマル公的サービスへの申請から支援を得る迄に 6-10 ヶ月必要である。加えて、政府からの支援状況は政府予算状況等に大きく左右される。こうした現況を踏まえ、第一年次、訪問相談チームの活動で障がい児特定と情報提供後、約 5 カ月の間に、情報提供を受けた障がい児家庭が障がい者証明書取得手続きを行い、障がい者証明書受領後、行政へ申請する数は多くを見込めない。JICA 実績では 3 年間で 46%、その 1/3 の 1 年では 16%（約 2 割）となり、当該指標目標値を 2 割と設定した。なお上述 JICA 実績からも明白なように、行政からの支援を実際に受けられる割合は低い。よって、行政のみならず民間の障がい者支援団体への支援も申請すると想定し、第 2-3 年次に、特定された障がい児の約 2 割が行政機関や障がい者支援団体の福祉サービスを受け、事業終了時には 3 年間を通し、

	<p>行う。(第 1 年次)</p> <p>4<sup>11</sup>. 特定された障がい児家庭のうち、2 割程度の世帯数がサービスを楽しむようになる。(第 2-3 年次)</p> <p>5. 3 年間を通し、訪問相談活動で情報提供を受けた障がい児家庭のうち約 4 割の世帯数がサービスを楽しむようになる。(第 3 年次)</p> <p>【確認方法】障がい児家庭の戸別訪問記録、アセスメントシート</p> <p><b>成果 3. 対象拠点 2 校において、障がい児受入に必要なバリアフリー施設と備品が整備され、適切に維持管理される。</b></p> <p><b>指標：</b></p> <p>1<sup>12</sup>. 対象拠点 2 校において整備されたバリアフリー施設と備品が、維持管理計画に基づき定期的な頻度でモニタリングを受け、適切に維持管理される。(第 1-3 年次)</p> <p>2<sup>13</sup>. 対象拠点 2 校において整備された多目的教室及び備品が、維持管理計画に基づき定期的な頻度でモニタリングを受け、適切に維持管理される。(第 2-3 年次)</p> <p>【確認方法】維持管理計画書、維持管理モニタリング報告書</p> <p><b>成果 4. 対象拠点 2 校において学校関係者の障がい児受入能力が向上する。</b></p> <p><b>指標：</b>1<sup>14</sup>. 対象拠点 2 校教師の障がいや IE に関連する知識が向上し、各種研修後の理解度テスト正答率が毎回 8 割以上となる。(第 1-2 年次)</p> <p>2<sup>15</sup>. 在校生の障がいに関する知識調査の正答率が事前テスト結果より 35% 改善する。また、正答率が平均して 6 割以上となる。(第 1-3 年次)</p> <p>3<sup>16</sup>. 在校生の、障がい児が教育を受けることについて肯定的に考える割合が増加する。(第 1 年次：回答者の 6 割、第 2 年次：回答者の 7 割、第 3 年次：回答者の 8 割)</p>
--	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

情報提供を受けた障がい児のうち計 4 割が行政福祉サービスを受給することを目指した。

<sup>11</sup> 同上。

<sup>12</sup> 他地域他事業で作成されたチェックリストを当該プロジェクト用に修正し活用する。

<sup>13</sup> 同上。

<sup>14</sup> 当会が 2017 年度に当会が実施したカンボジア事業（「カンダール州における、障がい児のためのインクルーシブ教育推進事業（第 3 期）」）において「インクルーシブ教育の概念」に関する理解度テストの正答率が 83.2%であったことから、それを目標に 80%とする。なお、このテストを受けたカンボジア事業の IE 推進部会メンバーの中には教員も含まれ、その後、同事業の地域での啓発活動に積極的に参加した実績がある。さらに、同事業では教員向けの能力強化研修を実施、講義の前後に行った確認テストの全体の平均正答率は、いずれも事後テストの正答率が上昇し、80%以上であった。これらの研修を行った後、聞き取り調査を行った結果、聞き取りを行った「17 名の教員全員が、研修で学んだ内容を日々の授業で実践しており、供与された教材を活用している、または補助教材を作成していると回答」するなど、成果がみられている。加えて、2016 年度のタジキスタン事業「ドゥシャンベ市における障がい児のためのインクルーシブ教育推進事業（フェーズ 3）」においても、事業の成果として「IE 研修を受けた拠点校 4 校で勤務する教員を追跡調査すると、9 割以上の教員が当会の研修で得た IE の知識および技術を実践に活かしていると回答し、7 割以上の教員が普通学級で実際に障がい児を受け持っている」ことが明らかとなっている。

<sup>15</sup> 2017 年に JICA は、日々現場レベルで障がい者と接している KP 州社会福祉局の職員 60 人を対象に、障がいに関する 3 日間の研修を行っている。その研修では、障がいに関する 16 項目の事柄（障害とは何か、障害をとらえる WHO モデルとは何か、CBID とは何か等）について、研修前後で参加者による理解度の自己アセスメント（「全く分からない」～「十分理解している」を 0～100%で数値化）を実施した。本事業で同様に知識調査を行うにあたり、上記研修実績を踏まえ、目標値を 35%と設定した。

<sup>16</sup> パキスタンにおける障がいに関する認識や理解はまだ不十分であり、障がい者への偏見や差別も根強くある。前述の JICA 案件では、障がい者が教育を受けることを肯定的に考えるようになった障がい者の割合が 71%であった。障がい者当事者ではない者の意識変化を生じさせるための、改善を伴いながらの活動となるため、1 年目は回答者の半数以上として 6 割、2 年目、3 年目は徐々に割合が増加することを想定し設定した。なお、事業開始後ベースライン調査を実施し必要なデータを取得する。

	<p>4<sup>17</sup>. 障がい児の、受け入れ環境が改善したと回答する割合がベースラインより増加する、また、一年目終了時平均 6 割、二年目終了時平均 7 割、三年目終了時平均 8 割となる。(第 1-3 年次)</p> <p>【確認方法】教師の理解度テスト結果、在校生への知識調査結果・意識調査結果、障がい児への受入環境に関する質問結果、個別面談結果</p> <p><b>成果 5. 障がい児の教育を受ける権利や重要性に関し、対象学校区住民の意識が肯定的になる。</b></p> <p>指標：1. スポーツや文化を通じた啓発イベントに、地域から 100 人以上が参加する。(第 1-3 年次)</p> <p>2<sup>18</sup>. 参加者対象の意識調査で、イベント参加後、障がい児が教育を受けることについて肯定的に考える割合が増加する。(第 1 年次：回答者の 6 割、第 2 年次：回答者の 7 割、第 3 年次：回答者の 8 割)</p> <p>【確認方法】イベント報告書、参加者意識調査結果</p> <p><b>成果 6. 対象拠点 2 校における教育支援活動が関係者と共有され、障がい児教育支援活動の参照ツールが作成される。</b></p> <p>指標：1. 活動計画で予定された頻度で、IE 推進チーム・コミュニティ訪問相談チーム等関係者と郡政府高官との定期会合が開催される。(第 1-3 年次)</p> <p>2<sup>19</sup>. 障がい児教育支援活動の各成果が他校他地域で障がい児教育を実施する際、参照できるツールとしてまとめられ、関係する教育局、社会福祉局等から合意を得て、印刷配付される。(第 2-3 年次)</p> <p>【確認方法】会議資料、定期会合議事録、文書化した参照資料</p> <p><b>成果 7. 障がい児教育支援活動の成果文書等を参考に、他地域・他組織にて障がい児教育支援に係る活動が実施される。</b></p> <p>指標：</p> <p>1<sup>20</sup>. 教員研修所または大学の教員養成コースにおいて、IE に関する講義が 1 回以上実施される。(第 3 年次)</p> <p>2. 行政関係者及び対象拠点 2 校関係者の協力のもと、新規対象 2 校にて、基礎的なバリアフリー環境が整備される。</p> <p>3. 行政関係者及び対象拠点 2 校関係者の協力のもと、新規対象 2 校にて、IE 推進チーム及び訪問相談チームが結成され、それぞれの活動が開</p>
--	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

<sup>17</sup> ベースライン (BL) は事業開始後確認する。当該指標は成果 4 の達成を測るものであるため、障がい児の受け入れ環境 (授業関連、先生の態度や対応状況、在校生の態度や対応状況) の 3 項目について 10 段階でチェック、また一年前と比較してどうか、上記項目についてそれぞれチェックすることを想定。質問対象者は、BL は 2 拠点校の障がい児と彼らの保護者、障がいのある教師、加えて、一年目、二年目、三年目にそれぞれ新たに就学した障がい児とその保護者を想定。活動 4 を通し、障がい児に対する偏見の要因と考えられる理解不足や誤解が改善・解消され、偏見等が減り障がい児に対するネガティブな対応が和らぎ、結果として、受け入れ環境が改善したと回答する障がい児の割合が増加すると想定。①4-1 の指標「教師の障がいや IE に対する理解が 7 割以上となる」、②教師対象研修後、障がい児に配慮した授業や態度と変わる、③4-2 の指標「在校生の障がいに関する知識」が向上すること (知識調査正答率 6 割)、④4-3 の指標「在校生の障がい児が教育を受けることについて肯定的に考える割合」が一年目 6 割、二年目 7 割、3 年目 8 割となる、という数値を踏まえ、目標数値を設定した。

<sup>18</sup> パキスタンにおける障がいに関する認識や理解はまだ不十分であり、障がい者への恐怖や差別も根強くある。改善を伴いながらの活動となるため、1 年目は回答者の半数以上として 6 割、2 年目、3 年目は徐々に割合が増加することを想定し設定した。

<sup>19</sup> 本事業の成果物として、ハリプールの障がい児を取り巻く環境や障がい児教育支援取組の実施方法等をまとめる。

<sup>20</sup> 正式な研修として導入するにはカリキュラムやモジュール等承認に複雑かつ長期間の手続きが必要となるため、教員研修所や大学関係者が彼らの裁量内で実施可能な単発・短時間の講義実施を想定している。

	<p>始される。(第3年次)</p> <p>【確認方法】教員研修関係者や大学関係者との打合せ議事録、研修前後の理解度テスト、アンケート</p>
(7) 持続発展性	<p>持続発展性を担保するため、当該プロジェクト活動を通し、整備した施設の維持管理能力向上、人材の養成・能力強化、行政官の関与促進、教員候補の能力強化、参照できるツール作成を予定している。行政官の関与促進については、ハリプールの教育局担当者や地域教員研修所担当官の IE 推進活動を通じた IE の重要性に関する理解促進や能力向上、また訪問相談活動における保健局や社会福祉局行政官等との障がい児情報共有や行政サービス提供への協力依頼を通し、彼らの障がい児の教育環境改善の重要性に対する理解促進と連携強化を図り、ひいては当該局における障がい児教育環境改善の取組が拡充されることを狙う。さらに、基礎的なバリアフリー施設や多目的教室の整備を行い、学校関係者が維持管理を適切に行うことができるよう維持管理に係る研修を実施、その上で維持管理計画を作成する。IE 推進に必要な知識・経験を蓄積した関係者(学校関係者、教育局や社会福祉局の行政担当官、保護者会員等地域住民、レディヘルスワーカー等)は、今後他校他地域に障がい児の教育機会拡充を進める際のリソースパーソンとなる。また、行政関係者(教育局、社会福祉局、保健局、州リハビリテーション評議会)との定期会合を通して、各種活動への彼らの関与を深めるよう促し、IE 推進に係る行政関係者の調整・連携を促進する。障がい児教育支援の各活動や実施方法をまとめ、当該プロジェクト完了後も現地関係者が障がい児への教育支援を実施する際に、参照できるツールを作成する。また、第3年次活動においては行政関係者のリードと拠点校関係者の協力のもと、新規2校において基礎的な教育環境整備と支援体制構築活動を実施する。一定の成果が達成されると、当該取組は展開可能な IE モデルとして現地関係者に認知されることが期待される。</p> <p>IE と特別支援学校を障がい児教育の両輪として掲げるパキスタン政府の教育方針のもと、KP 州は公立学校でバリアフリー設備建設は推進しているものの、IE 推進に必要な他の課題(例:教師の能力研修等)対策が実施されていない。教員研修所あるいは大学において、当該プロジェクト活動を踏まえた IE に関する講義が行われることにより、新任教師が IE に関する基礎知識を得ることができる。継続的な研修実施により、KP 州における障がい児教育推進に必要な教員能力向上の一助となる。</p> <p>事業の持続性及び上位目標「KP 州ハリプールにおいて、より多くの障がい児が、個々の状況に合った教育を受けられるようになる」に係る指標(事業完了後3年)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・拠点対象2校(男子小学校の GPS No4 校、及び女子小学校の GGPS TIP 校)において、教員と児童の保護者が児童のニーズに関する話し合いを踏まえ、事業完了時と同程度の数の障がい児を一般教室・多目的教室でそれぞれ受け入れ続ける。</li> <li>・本事業の新規対象2校において、事業完了時と同程度数の障がい児を受け入れ続ける。</li> <li>・本事業の拠点対象2校区において、訪問相談チームのレディヘルスワーカーが障がい児家庭への情報提供等支援を継続して行う。</li> <li>・拠点対象2校の IE 推進チーム・訪問相談チーム関係者が、他校から</li> </ul>

	<p>の照会や協力要請に対応する。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ 教員研修所あるいは大学の教員養成コースにおいて、IE に関する講義が行われる</li><li>・ ハリプール教育局や社会福祉局等の行政官が、障がい児への教育支援を普及する際、当該プロジェクトで作成したツールを参照している</li><li>・ ハリプール郡内にある、本事業の対象 4 校以外の小学校で、障がい児教育支援の取組が進められている</li></ul>
--	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------